

初等音楽科教科書におけるオノマトベ

—教育目的から見た出現数の学年差—

森 保 尚 美

(本講座大学院博士課程前期在学)

Onomatopoeia in Elementary School Music Textbooks: Grade Differences in Frequency of Onomatopoeia Use/Appearance from the Perspectives of Educational Purposes

Naomi MORIYASU

Abstract

The aim of this study is to identify the educational functions and possibilities of the use of onomatopoeias in elementary school music textbooks. Onomatopoeias in three authorized textbooks are counted and sorted according to its educational function.

Current music textbooks have been used since 2011. The revised course of study in 2008 has shown new common issues. They are pitch, rhythm, and tempo which are elements characterizing music. Additionally, repetition and call and response give students a feel for the composition of music. About lyrics, only “meanings of lyrics” and “contents of lyrics” are focused on.

However, two perspectives are not paid enough attention in the new course of study. One is that we should purposely treat sound and vibrancy of words as musical elements. The other is onomatopoeia should be used in teaching.

Therefore, considering this current situations, onomatopoeia should be focused on as a musical matter. Three authorized textbook companies examined how much onomatopoeia is used in current music textbooks in each grade. They considered educational purposes of music in elementary school as well. The results show that onomatopoeia is used in about half of the music textbooks in early elementary school years and the numbers gradually reduce as the grades advance. Additionally, there are more than 700 kinds of onomatopoeia in lower grades. They are intended to facilitate the understanding of lyrics and the instruction of musical skills.

1 はじめに

オノマトベとは、古代ギリシャ語に起源をもつ言葉で、音のないものや、聞こえないものに対して、その状況を感じて表した言葉や、人・物・生物から発した音を表す言葉などを指し、擬音語（擬音語・擬声語）と擬態語の総称として用いられている。オノマトベは、日常会話の他、文学作品や芸術作品、新聞や商品名などに幅広く用いられており、オノマトベを用いることによって、表現しにくい音、動作の様態、物事の状態などの微妙なニュアンスを簡潔に表現することができる。日本においては、唱歌のように伝統的な音楽の旋律構造を記憶しておくための教授として用いられ、奏法の情報を含めて雅楽・箏曲・三味線音楽の練習場面や伝承に用いられ、してきた歴史がある。

従来、オノマトベは、子どもが用いる稚拙な表現として言語学の研究対象になることは少なかったが、田守・スコウラップ（1999）らによって日本語における重要な言語要素であることが、また、小林（1997）

や滝浦（1999）らの研究によって子どもの認知や発達の変化と関係が深いことが明らかにされ、認知言語学や認知心理学での研究対象として取り上げられるようになってきた。

そして、現代においても、運動・スポーツ領域で有山・吉川（2006）が、競技者間で使用されるスポーツ・オノマトベの効果や可能性について検討している。音楽科教育では、河本（2011）が、スポーツ・オノマトベの先行研究を音楽科教育へ援用し、比喩的表現を伴う指導言に着目して、大学生と成人を対象に歌唱実技指導場面のオノマトベを抽出し、その用法と意義を整理した。藪・味府（2011）は、平成16年検定音楽科教科書「おんがくのおくりもの1」のオノマトベの一例をとりあげて、音楽科教育における教育的な役割について言及した上で、幼稚園での実践研究をもとにオノマトベによる幼児の音楽表現の可能性についての見解をまとめた。

一方、平成23年度から使用されている現行の教科書は、平成20年の学習指導要領の改訂で新設された「共通事項」を受け、音色、リズム、速度など音楽を特徴付けている要素や、反復、問いと答えなどの音楽の構成を感じ取ることができるように意図した編集がなされている。しかし、歌詞に関しては「歌詞の意味」や「歌詞の内容」という着眼にとどまり、ことばの音や響きを音楽的な要素として意図的に扱おうとする視点や、指導言としてオノマトベを活用しようとする視点が十分ではない。

このような現状をふまえ、音楽的素材としてのオノマトベの教育的機能を明らかにするために、まず、現在使用されている3社（教育芸術社・教育出版社・東京書籍）の音楽科検定教科書（以下、教科書）に掲載されているオノマトベの出現状況を調査することとした。歌詞中のオノマトベにおける研究には、言語学の立場から、森山（2013）が、明治以降の11冊の楽譜集から童謡230曲を対象にオノマトベの特徴を明らかにした研究がある。本稿ではオノマトベを音楽科教育における学習素材としてとらえ、教科書に記されているオノマトベを教育目的からとらえ、分析と考察を行う。

2 教科書の調査概要と研究方法

2.1 調査対象

平成23年度から26年度用として出版された文部科学省検定教科用図書3社（全18冊）の教科書を調査対象とした。教科書は各社とも各学年1冊、計6冊で構成されている。

- ・教育芸術社 「小学生の音楽」 第1学年～第6学年
- ・教育出版社 「音楽のおくりもの」第1学年～第6学年
- ・東京書籍 「新しい音楽」 第1学年～第6学年

2.2 抽出方法

次の調査項目を入力した。

(1) 教科書中の楽曲数

題名のある作品は、五線譜・歌詞譜・リズム譜に関わらず楽曲として数える。鑑賞曲についても、題名が掲載されていれば1曲と数える。題名が同じであっても、器楽曲と鑑賞曲のように形態が異なる記載がされていれば2曲と数え、同一タイトルで2種類の編曲合奏が掲載されている場合は1曲とする。

(2) オノマトベの含有曲数

歌詞にオノマトベが1語以上掲載されている楽曲数を調べる。

(3) オノマトベの延べ語数・語彙数

楽譜中に記載されている数をそのまま「延べ語数」としてカウントする。なお、楽譜中に1番の歌詞だけが掲載され、別のページに2番以降の歌詞を含む複数の歌詞が掲載されている場合は、多くの歌詞が掲載されているページを選択して調査対象とする。また、学年をまたいで同一曲が掲載されている場合は、各々の学年でカウントする。「語彙数」とは、1曲中で繰り返されたオノマトベを除いた語彙の数である。

(4) オノマトベの分類

オノマトベの語彙を擬音語・擬態語・その他の3つに分類する。

(5) 楽曲外のオノマトベ

(1) に示した楽曲をのぞき、練習用のリズム譜や例示用の譜面、説明や問いなどの文にオノマトベが

使用された場合は、楽曲外のオノマトベとして語彙を調べる。

2.3 本稿におけるオノマトベの定義

日本語オノマトベ辞典（2007、小学館）では、オノマトベの基準を次のように3つ提示している。

- 擬音語・・・人間の発声器官以外から出た音を表した言葉（にゃあにゃあ、ワンワン、トントン等）
- 擬声語・・・人間の発声器官から出した音声でひとつひとつの音に分解できない音を表した言葉（ガガヤ、ウーム等）
- 擬態語・・・音のないものや聞こえないものに対して、その状況を音そのもののもがもつ感覚で表した言葉（きらきら、ひらひら等）

本稿における「オノマトベ」の分類は田嶋（2006, p.194）の定義に基づき、「擬声語と擬音語をまとめて擬音語、擬情語を含む擬態語を擬態語とする。」また、従来の定義の擬音語・擬態語の他、特定の名詞などの変形形（たまご→たまたまご等）を「その他」としてオノマトベに含むこととする。抽出のカウントにあたり、森山（2012, pp.43-44）の研究を参考にし、下のいずれかにあてはまるものとした。

- ①「り」の語末付加ができるもの。
- ②促音（「っ」）の語末付加ができるもの。
- ③撥音（「ん」）の語末付加ができるもの。
- ④反復形のオノマトベは、語幹をさらに反復して形態の拡張ができるもの。
- ⑤結果副詞で、語中にQ（「っ」）が挿入されているもの
- ⑥（動作の様態を描写する様態副詞のうち）2モーラ反復形で「と」を随意的に伴い、「だ」を伴って述語になることはできないもの。（例 ずるずる ○ずるずると ×ずるずるだ）
- ⑦（主体や対象の変化した状態を描写する結果副詞のうち）2モーラ反復形で「に」を義務的に伴わなければならないもの。また、「だ」を伴って述語になることができ、「の」を伴って名詞を修飾することができるもの。（例 つるつるに ざらざらだ ざらざらの）
- ⑧音や声の模写であるもの

外国語の言語音の模写、またはその亜流が日本語歌詞の曲中に部分的に使用され、かつ、歌詞中で言語の意味を促す要素となっていない場合、「その他」に含める。

また、歌詞中の特定の言葉の反復、変形形も臨時的なオノマトベに似た傾向がみられるものとして「その他」に含める。（例 ルルル… チャチャチャ チムチムニー）

2.4 オノマトベの区切りの定義

- ①オノマトベの基本の長さは、楽譜の1小節ごとに区切ることとする。ただし、楽譜上、中途半端に複数の節にまたがっており、小節単位で区切ると明らかにオノマトベの形態が崩れる場合は小節を跨いで一つにする。（例：小節で区切った場合、歌詞上「ひそひそ」が「ひそひ」と「そ」に分かれる場合など）
- ②1小節以上に連続して全く同じ形のオノマトベが反復している場合、2小節以上にまたがっても反復が終わるまで1つのオノマトベ扱いにする。（4小節間のヨーイヨーイデッカシヨが2回反復している場合、オノマトベ数は2とする。）
- ③同じ小節の中に複数のオノマトベが含まれていた場合は、2つのオノマトベが連続していれば複合形として1つのオノマトベと考え、間にオノマトベ以外の言葉が含まれていれば、それぞれ別のものとして2つと数える。
- ④2モーラ以上のララララやルルルルなどの副歌詞がある時は連続したものを1つと数える。
- ⑤同じオノマトベが同じ曲に複数回登場した場合、延べ語数と、繰り返しを除いた語彙数の双方を数える。
- ⑥原型が反復オノマトベの場合、1反復までの形とし、生物の鳴き声の場合は登場形のままとする。⑥に当てはまらないものは歌詞のままの形を基本形とする。

2.5 分析の観点

下の観点からグラフや表を作成し、分析する。

- (1) 学年推移
- (2) 語彙の分類（擬音語・擬態語・その他）
- (3) 教育目的（スキル教授・歌詞理解・音響効果など）の分類

3 調査結果

2.2 (1) の方法で総楽曲数を示したものが表1である。

表1 楽曲数

学 年	1	2	3	4	5	6	合 計
教育芸術社	45	40	43	44	40	42	254
教育出版	43	43	43	49	47	40	265
東京書籍	36	38	38	43	39	40	234

(1) 学年推移

出現曲数とオノマトペを有する楽曲の含有率（表2）からわかるように、オノマトペを有する楽曲数は各社とも低学年ほど多い。学年があがるほど、オノマトペを有する曲が減少するが、第3学年と第4学年の変化は2社が逆転している。2社の題材を比較したところ、第3学年でリコーダーが導入され、歌唱教材の絶対数が減少していた。全社とも、低学年では約半数、中学年では2～3割、高学年では2割以下の楽曲にオノマトペの記載があることがわかる。学年の推移の状況を表したものが図1である。

表2 オノマトペの出現曲数と含有率（%）※小数点以下第2位を四捨五入

学 年	1	2	3	4	5	6	合計(曲)
教育芸術社	24 (53.3%)	19 (47.5%)	9 (20.9%)	16 (36.4%)	7 (17.5%)	2 (4.8%)	77 (30.3%)
教育出版	23 (53.5%)	24 (55.8%)	13 (30.2%)	13 (26.5%)	8 (17.0%)	2 (5.0%)	83 (31.3%)
東京書籍	17 (47.2%)	18 (47.4%)	10 (26.3%)	14 (32.6%)	4 (10.3%)	1 (2.5%)	64 (35.5%)

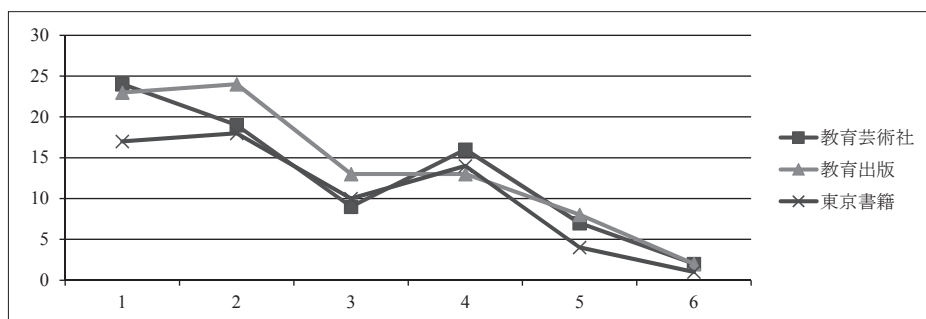


図1 オノマトペ出現曲数の学年推移

表3からわかるように、延べ語数は第1学年と第2学年の多さが顕著である。また2学年から3学年への語数の差が大きく、教育出版を除く2社は、4学年から5学年への差も大きい（表3）。

表3 オノマトペの延べ語数

学 年	1	2	3	4	5	6	合 計
教育芸術社	117	117	39	61	12	6	352
教育出版	111	189	46	61	50	14	471
東京書籍	86	103	51	66	13	1	320

(2) 語彙（擬音語・擬態語・その他）

各教科書のオノマトペの分類結果（擬態語・擬音語・その他）を低・中・高学年ごとに示したものが図2である。各教科書のオノマトペの語彙（擬態語・擬音語・その他）を低・中・高学年ごとに分類した結果、擬態語と擬音語とその他の数をそれぞれ3社で比較すると、教育芸術社が最も多く擬態語をもちいた歌詞を用いていた。また、歌詞中に最も多く教育出版社が擬音語を用いていた。そして特定の名詞の変形型、外国語の模写や垂流など、その他に該当するオノマトペは東京書籍が最も多かった。

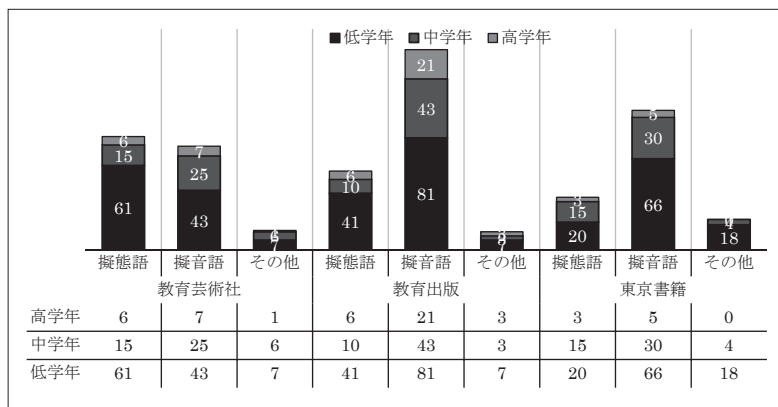


図2 楽曲中のオノマトペの種類

(3) 教育目的（スキル教授・歌詞理解・音響効果など）

表・味府（2011）は、「おんがくのおくりもの1」におけるオノマトペの機能を①歌詞内容の理解を助けるオノマトペ（例：かもつれっしゅ シュッシュシュ）②うたに合わせたリズム遊びに用いられるオノマトペ（例：ぶんぶんぶん）③鍵盤ハーモニカの奏法をあらわすオノマトペ（とうーとうー：タンギング）に分類できるとし、①は、幼児のうたのように、動物や昆虫、親しみのある乗り物の特徴や様子の内容を理解しやすくするための機能を果たし、②と③は、音楽活動において教師が学習者にその学習内容（初歩的スキル）を分かりやすく教えるための教授手段であると考えた。

本稿では、表・味府の分類の他、音響そのものの効果をねらった歌詞も音楽科として重要であると考え、3つの分類を行う。

- ・A リズム感の体得やスキル伝達のためのオノマトペ（リズム遊びを含む）

例：リコーダーのタンギング「トゥートゥー、ティーティー」、リズム遊び「タッカタタ、ドンカカ」

- ・B 歌詞内容を表すオノマトペ

例：雪が静かに降る様子「しんしん」、めだかが泳ぐ様子「つーいつい」、ぶたの鳴く声「ぶーぶー」

- ・C 音響効果を高める目的のオノマトペ

例：「ララララ・・・」、 「ルルルル・・・」、 「ばななんばななん」

なお、音響効果はすべてのオノマトペが有するものであるが、本稿では教育目的から見た音楽科固有の機能を識別できるよう、複数のカテゴリにあてはまる場合の優先順位をA>B>Cと決めた。

例えば「タン・タタ」というオノマトペは音響効果を有するが、リズム感の体得を目的として記載されている場合はAに分類した。同様に「しんしん」のように雪の降る状況を表すオノマトペは、音響効果もあるがBに分類した。そしてスキル教授や意味理解に関連しないと考えられるオノマトペだけをCとした。Cには、「ばななんばななん」のように、ばななの意味理解を助けるのではなく、言葉の響きの効果に作詞の意図があると思われるもの、「ちえっちえっちえっこり」のように外国語の意味理解に関係なく、音響効果を味わうものなどが該当する。なお、教科書中の楽曲外で、練習用のリズム譜や例示用の譜面、説明や問いなど説明欄にみられるオノマトペは、基本的に教育的な目的をもつと考え、楽曲中のオノマトペに加えてA～Cの分類を行った。

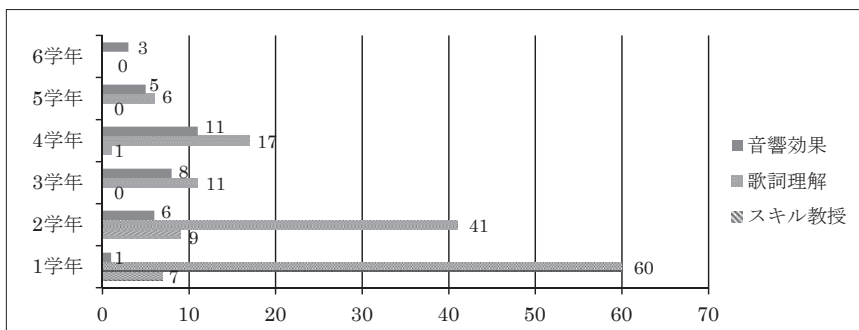


図3 教育芸術社

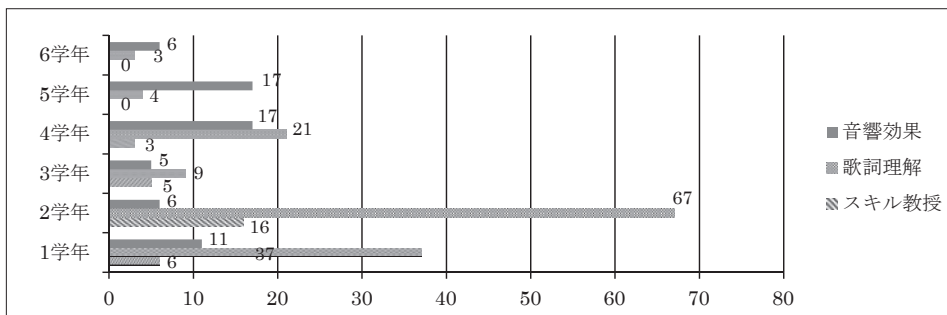


図4 教育出版

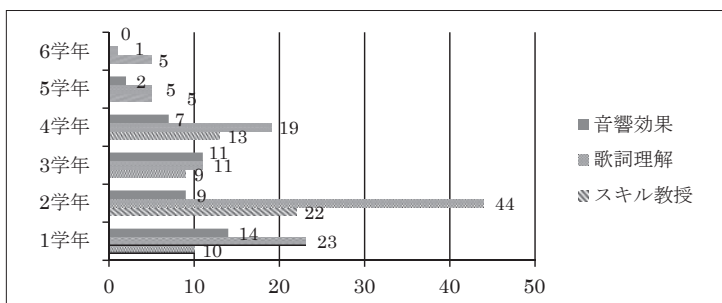


図5 東京書籍

図3～図5によると、低学年ではオノマトベが歌詞理解の機能をもつ傾向にあり、教育芸術社と教育出版では中学年以上に音響効果としての使用がみられる。そして東京出版は、オノマトベの全体量は少ないが、教授法や音響効果として他の2社より多く活用していることがわかる。

4 考察

現行の初等音楽科教科書からオノマトベの記載状況を整理した結果、いくつかの様相が明らかになった。

第1に、小学校において、低学年では約半数の楽曲にオノマトベが用いられており、中学年、高学年と使用の頻度が低くなっていることがわかった。低学年では、主に歌詞中にオノマトベを用いることによって、物事の状態などの微妙なニュアンスや、登場人物の気持ちなどを簡潔に表現することができるという特徴が、旋律やリズム上の制約に適合し、歌詞に反映しやすいのではないかと考える。(譜例1)

譜例 1 《いるかはざんぶらこ》『小学生の音楽 2』

譜例 2 《こぎつねの歌》『音楽のおくりもの 4』

また、譜例 2 に示したオノマトベは、言葉の音の響きが音楽の効果として機能している。歌詞中に表現されたラララ…ヤルルル…などの歌詞も同じである。

オノマトベは現在の生活の中で国会会議録や商品名に至るまで増える傾向にあり、学校教育においても現行の教科書中の多くの楽曲で活用されていた。従って、これからの音楽指導で音楽的要素としてオノマトベに着目する意義が見いだせるのではないかと考える。

第 2 に、指導法としてのオノマトベの機能が現在でもスポーツの専門教育などの学校教育以外の場面で継続されているという事実は重要である。伝統的な教授法として、奏法の情報を含めて箏曲や三味線音楽の練習や伝承に用いられたりしてきた手法は、現在の公教育では鍵盤ハーモニカやリコーダー、和太鼓のリズム体得に受け継がれている。また、今日的課題に対して、技術の教授法としての機能だけではなく、知的障害をもつ児童への教育的支援についての先行研究に着眼すれば、通常学級における発達障害をもつ児童への支援や、帰国入国児童への支援の活用に意義が見いだせる。東京書籍の「新しい音楽」は、他の 2 社に比べオノマトベを有する楽曲数が少ないが、楽曲以外の紙面での数が多く、リズムの体得のための「タン・ウン」などの使用や、リコーダーの奏法を支援する「トゥー・ティー」などのオノマトベの量が多い。音楽科の指導言として機能している例である。(譜例 3)

譜例 3 《リズムアンサンブル》『新しい音楽 5』

第 3 にオノマトベを有する楽曲数は、低学年から高学年にむけて減少しており、小林 (1997) や滝浦 (1999) らの研究で示されたように、音楽学習においても、子どもの認知や発達の变化と関連性があると考えられる。仲本 (2009) は、オノマトベの持つ 3 つの特質を類像性 (形式と意味が関連性を持つこと)、身体性 (身体的な知覚や運動を反映すること)、全体性 (状況や場面の全体を概念化すること) とし、これらの特徴を認知言語学の観点から考察した。表現領域の歌唱教材においては、歌詞内容の理解も教育目標の一つであり、楽曲の難易度とともに子どもの認知の発達段階に即した歌詞を有する楽曲が配列されている。そこで、歌詞の内容を問う際の手掛かりやキーワードとして、オノマトベに着目することで、音楽科における内容理解と方法の改善の視点を得られる可能性がある。

5 おわりに

本稿では、初等音楽科教科書のオノマトペの教育的機能を明らかにするために、まず、現在使用されている3社（教育芸術社・教育出版社・東京書籍）の音楽科教科書に掲載されているオノマトペの出現状況を調査し、教育目的から見た分析と考察を行った。今後は子どもの創作にオノマトペを取り入れた授業事例の分析と考察を通して、教育的機能の範囲を検証していきたい。

【引用・参考文献】

- 浅野鶴子・金田一春彦（1978）『擬音語・擬態語辞典』角川書店。
- 有山逸平・吉川政夫（2006）「競技サッカーにおけるスポーツ・オノマトペ使用の実態と意識」『日本体育学会大会予稿集』第57号，p.120。
- 裴珉卿・味府美香（2011）「オノマトペによる幼児の音楽表現の可能性」『人文論究』第80号，pp.83-95。
- 河本洋一（2011）「オノマトペを用いた歌唱指導の意義に関する一考察」『札幌国際大学紀要』42号，pp.25-35。
- 小林春美（1997）「語彙の獲得：ことばの意味をいかに知ることか」『子どもたちの言語獲得』大修館書店，pp.85-109。
- 三善晃ほか（2013）『小学音楽 おんがくのおくりもの1』教育出版。
- 三善晃ほか（2013）『小学音楽 音楽のおくりもの2』教育出版。
- 三善晃ほか（2013）『小学音楽 音楽のおくりもの3』教育出版。
- 三善晃ほか（2013）『小学音楽 音楽のおくりもの4』教育出版。
- 三善晃ほか（2013）『小学音楽 音楽のおくりもの5』教育出版。
- 三善晃ほか（2013）『小学音楽 音楽のおくりもの6』教育出版。
- 森山未季子（2012）「童謡の歌詞におけるオノマトペ—時代差の観点から—」『語文』第百四十三輯，pp.34-45。
- 森保尚美（2013）「子どもの思いを歌詞に取り入れた授業づくり—オノマトペの響きを味わう題材の開発—」『学校教育』No.1150，pp.24-31。
- 仲本康一郎（2009）「感性の言語学1—オノマトペ再考」『留学生センター紀要』5号，p.3。
- 小原光一ほか（2013）『しょうがくせいのおんがく1』教育芸術社。
- 小原光一ほか（2013）『小学生のおんがく2』教育芸術社。
- 小原光一ほか（2013）『小学生のおんがく3』教育芸術社。
- 小原光一ほか（2013）『小学生のおんがく4』教育芸術社。
- 小原光一ほか（2013）『小学生のおんがく5』教育芸術社。
- 小原光一ほか（2013）『小学生のおんがく6』教育芸術社。
- 小野正弘（2007）『日本語オノマトペ辞典』小学館。
- 田嶋香織（2006）「オノマトペ（擬音語擬態語）について」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』16号，p.194。
- 高野美由紀・有働真理子（2010）「養護学校の教師発話に含まれるオノマトペの教育的効果」『特殊教育研究』48号（2），pp.75-84。
- 滝浦真人「幼児言語におけるオノマトペとメタファー—子どもはいかにして世界を表現するか—」オンライン（<https://sites.google.com/site/takiuramasato/>）〔滝浦真人のサイト2013.8.29採取〕。
- 田守育啓・スコウラップ，ローレンス（1999）『オノマトペ形態と意味』くろしお出版。
- 湯山昭ほか（2013）『あたらしい音楽1』東京書籍。
- 湯山昭ほか（2013）『新しい音楽2』東京書籍。
- 湯山昭ほか（2013）『新しい音楽3』東京書籍。
- 湯山昭ほか（2013）『新しい音楽4』東京書籍。
- 湯山昭ほか（2013）『新しい音楽5』東京書籍。
- 湯山昭ほか（2013）『新しい音楽6』東京書籍。